第一章　上海より南京へ

第一節　上海付近の戦闘

一、上海派遣軍の急派

北支事変勃発後、上海付近の情勢は日を追って緊張が高まっていた。上海事変（第一次）停戦協定に違反して中国軍はすでに前年末から上海周辺の非武装地帯を要塞化しつつあったが、事変後この地帯への軍隊集中はますます顕著となった。甚だ劣勢であった対ソビエト兵備を憂慮して、極力戦火を華北に局限しようとしたわが陸軍統帥部の願望にもかかわらず、昭和十二年八月九日の大山勇夫（いさお）海軍中尉殺害事件を契機とし、ついに十三日には海軍特別陸戦隊（兵力約五千に満たず＝戦史叢書）と中国軍（張治中の指揮する第九集団軍三ヶ師）との交戦が始まった。

八月十五日、日本政府は「我ガ居留民ノ生命財産ト権益ヲ保護」するとともに「支那軍ノ暴戻ヲ膺懲シ以テ南京政府ノ反省ヲ促ス為」との声明を発し、上海派遣軍の派遣を決定した。軍司令官には中国通として知られる松井石根[9期]大将を予備役から起用したが、兵力の規模は初め二ヶ師団基幹という最小限に止められたのである（「対ソ関係のため」というのが、当時石原莞爾[21期]＝参謀本部第一部長の上海派遣軍参謀長・飯沼守[21期]少将に対する説明であった）。

また純粋の作戦軍ではなく、一時的派遣の意味をもって「戦闘序列」が下令されることなく軍の「編組」[1]が示された。戦局不拡大方針の考えをみることができよう。（戦史叢書）

派遣軍軍司令官に与えられた任務も「上海附近ノ敵ヲ掃滅シ上海並其北方地区ノ要線ヲ占領シ帝国臣民ヲ保護スヘシ」という極めて限定された消極的なものであり、「之は松井軍司令官も大分不満足だったのであります。八月十八日

の送別会の挨拶でも此のことを申されまして省部の列席者は大いに困つたのであります」と、下村定（さだむ）・当時参謀本部第四部長（のち第一部長20期）は後日、支那事変史の編纂を担当した竹田宮恒徳（つねよし）42期大本営参謀に対して回想している。

戦況が逼迫しているため、折りからの荒天を衝いて軍艦によって急派された上海派遣軍すなわち第三師団、第十一師団（天谷支隊＝支隊長・歩兵第十旅団長・天谷直次郎（あまや）21期少将・歩兵第十二聯隊基幹欠）は八月二十三日、呉淞（ウースン）および川沙鎮方面に上陸し、上海西北方地区の中国軍を駆逐することとなった。搭載力を大きくするため、特に「陸奥」「長門」などの戦艦をはじめ重巡「妙高」「青葉」「羽黒」「足柄」「那智」「愛宕」、軽巡「多摩」「五十鈴」「川内」「那珂」などを充当したのであるが、戦艦を輸送船に代用し、陸兵をハンモックで運ぶなど空前絶後のことで、当時の戦況の急をよく物語っている。

一方、蔣介石は大山事件を契機として対日全面抗戦を宣言し、八月十五日総動員令を下令するとともに自ら陸海軍総司令に就任し、着々と戦備を整えた。当時、上海戦線に集中した中国軍は十四～十五ヶ師に達し（その後毎日一～二ヶ師増強されて上海戦末期には約八十三ヶ師に達した(2)）、「秋葉を掃ふ勢にて一挙に上海倭寇海軍根拠地を掃蕩せん」（中国軍の基幹を形成した八十八師青年将校の言(3)）との意気に燃え、縦横に走るクリークに囲まれ、点在する壁の厚さ二十五糎に達する堅固な煉瓦造りの住民家屋によって頑強に抗戦したため、我が軍は対壕(4)を掘って進むことを強制されるなど、戦闘は要塞攻撃の様相を帯びて戦線は膠着し、損害が続出した。

二、兵力増強（重藤支隊、天谷支隊、第九、第十三、第百一師団および重砲兵）

ここにおいて中央統帥部は、台湾守備隊をもって編成した重藤支隊（歩兵五ヶ大隊基幹）を増加し、青島居留民保護のため大連に控置されていた天谷支隊を第十一師団長の隷下に復帰させたほか、さらに内地から第九、第十三、第

百一の三ヶ師団と、堅固な陣地突破の重砲火力として十五サンチ榴弾砲一ヶ旅団のほか十サンチ加農（カノン）砲、十五サンチ加農砲、さらに二十四サンチ榴弾砲部隊を増強した。九月二十日現在、上海派遣兵力は実に十九万人という予想外の大兵力を注ぎ込むことを余儀なくされ、日本内地に残る常設師団はわずか近衛、第七師団（旭川）のみというありさまとなった。

しかも、第十三（東北）、第百一（東京）の両師団は、予後備兵から成る特設師団で、歩兵第一聯隊営庭で、歩兵第百一聯隊の軍装検査を視察した参謀本部作戦課の井本熊男37期大尉は「年寄りの集まり、皆一家の大黒柱で、これでは……と思った」と回想し(5)ている。満洲に多くの現役師団を張りつけておかねばならぬ二正面作戦の弱点が明らかに現われていた。また、この派兵は最高統帥の意志変更に基づくものとはいえ、結果的には兵学の戒める兵力の逐次使用の典型となり、敵に対する衝撃力を著しく減殺した。

ともあれ、十月上旬、兵力を増強された派遣軍は攻撃を再興し、凄絶な陣地戦を繰り展げたが、わが砲兵弾薬は底をつき（たとえば十五榴は一日一中隊三〇発に制限せられた＝戦史叢書）、攻撃の重点たる第三師団は、幅二キロの正面に一時、砲一二〇門の協力を受けたが、弾薬が不足して戦闘は進捗せず、十月二十六日、ようやく大場鎮を攻略し、翌日蘇州河の線に進出した。この間とくに第三、第十一師団の歩兵は、当初出征した者は殆ど死傷し補充員と入れ替わった。これは国軍が日露戦役以後、経験したことのない大損耗であった。

戦死者の残した個人装備は相当な量にのぼったが、縁起をかついでこれを使用することを皆いやがったという。わが旧式着発手榴弾は発火しないものが多く、大西一（はじめ）36期派遣軍参謀は、永津佐比重（さひしげ）23期歩兵第二十二聯隊長に「こんなもの、使えるか」と叱りつけられ、参謀飾緒をひきちぎられそうになったと回想している。

永津大佐は上海派兵直前まで参謀本部支那課長として田中（新一）軍事課長、武藤（章）作戦課長らとともに「支那は一撃すれば崩れる」とする最強硬派であったのである。

土屋正治氏[46期]（歩一九第四中隊長）は、この手榴弾を評していわく、「ああ、あんなもの、日露戦争の遺物ですよ」。

「近接戦闘用資材は、中国軍のものに比し資質数量ともに劣弱である」とは、参謀本部第三課員・二宮義清[5][34期]少佐の視察報告である。

静岡では歩三四の戦死者のあまりの多さに、「田上八郎[25期]聯隊長留守宅に投石する者あり」と聯隊史は記している。

上海派遣軍の十一月八日までの戦死傷者累計は、四三、六七二（戦史叢書）。総兵力の約五分の一が死傷したのである。

中国軍の損害については、十一月二十五日中支那方面軍特務部長は「開戦以来、当方面に現われた敵兵力は約八三ケ師、うち半分は消耗し、現在活動できるものは四〇万内外と判断する」と報告している。（戦史叢書）

この数字は甚だ過大であるが、中国軍がいかによく戦ったかを窺わせる数字である。

もっとも、当時上海戦線に在ったドイツ軍事顧問団長フォン・ファルケンハウゼン[6] Alexander Ernst von Falkenhausen 将軍（第二次大戦中、一九四四年ベルギー・フランス軍政長官、のちヒトラー暗殺にかかわる）は中国軍の勇戦を賞賛しつつも、「日本軍の優勢な砲爆撃下の固定陣地における頑強な防禦戦闘は思慮に欠けたものと言わざるを得ない。その犠牲は中国にとり主要な攻勢力を失わせることになる」と批判し、「代わるに高度に訓練された機動攻撃によるべき」ことを蔣総統に提言し、「中国は必要ならば五十年戦争の遂行も可能であり、広大な中国本土において日本は終局的には敗北するだろう」と述べた。

なお、上海戦を戦った第八十八師ほか中央軍の精鋭の多くは、ドイツ軍事顧問団によって訓練された軍隊であったし、またわが海軍渡洋爆撃隊を悩ませた南京鶏鳴寺東側高地防空砲台の中口径ドイツ製高射砲は、フォン・ブロンベルク独国防相らの好意により、開戦直前ドイツから海路到着したばかりの電動照準装置を含む最新式のものであった。

三、海軍航空の南京空襲と陸軍航空の上海進出

これよりさき、海軍航空の開戦第一撃・南京空襲は、荒天を衝いて長崎県大村から飛び立った第一聯合航空隊によって八月十五日開始された。渡洋爆撃を可能にしたものは新鋭の九六式陸上攻撃機で、爆弾搭載重量〇・八㌧、最大四五〇〇㌔の航続力を有していた。わが中攻二十機は暴風雨のため、幾度か空中分解の危険を感じつつも高度七千㍍をもって支那海を横断、南京放送局の電波を探知して方向を求め、三百乃至四百㍍の高度をもって南京に到着、低空において大校・句容両飛行場を攻撃した。防禦砲火熾烈、格納庫三、地上の敵機八を破砕したが、有力な敵戦闘機の反撃を受け、九機を撃墜したもののわが二機を失い帰途二機帰還せず、夜半済州島基地に到着したものは十六機であった。その後、夜間爆撃に転換して継続したが、中国軍の防空戦[7]闘力は軽視できなかった。

八月二十三日、駐日の米、英、仏、独他各国大使は連名で、南京市内に非爆撃地帯設定を申し入れて来たので、政府、軍は協議のうえ、大使館所在地方面を非爆撃地帯とすることとした。

国防上、主力艦隊決戦のための貴重な戦力である中攻（九六式陸上攻撃機）部隊の損害多発を危惧した軍令部は八月二十七日、「敵ノ防禦厳重ナル南京方面ニ対スル航空攻撃ハ陸上基地整備後艦爆艦上戦闘機ヲ以テスルヲ有利ト認ムルヲ以テ特ニ緊急トスルカ若クハ大ナル効果ヲ期待シ得ル場合ノ外中攻ニヨル攻撃ハナルベク差控フル様」長谷川清[海兵31期]第三艦隊司令長官に要望し、艦隊は即日、中攻の攻撃目標を隴海線の徐州駅に転換した。

幾多の戦友はこの地の攻撃に殉じ
幾多の戦友はこの地より攻撃に出て帰らざりき[8]

のちに、南京城外光華門に近い大校飛行場北端に建てられた石碑に刻まれた文字である。「この飛行場攻撃はわれわれにとっては虎穴にひとしかった。南京空襲参加とは『金鵄勲章』への最短距離を意味した」とある中攻乗員は回想している。

九月八日、鋭意整備中であった上海市北東郊外の公大飛行場がほぼ完成し、待望の陸上航空基地を得た第二聯合航空隊司令官・三竝貞三（みつなみ）海兵37期大佐の指揮する新鋭の艦上攻撃機、艦上戦闘機部隊は南京空襲を再開し、九月十九～二十五日、十一回延べ二八九機の攻撃により、決定的な航空撃滅成果を報じた。九六式艦上戦闘機の活躍が目立っていた。

この艦上戦闘機による南京空襲開始の九月十九日、長谷川第三艦隊司令長官は第三国人の南京退去を勧告したが、これに対し九月二十二日、駐日米大使グルーは米国官民の南京退去には応じられぬこと、損害賠償要求の権利を留保すること、南京への空襲停止を強硬に日本政府に申し入れ、英国もまた類似の態度を採った。

わが政府は、第三国の権益を尊重する旨を答えたものの、軍事目標攻撃は国際法違反とは認めず、わが爆撃を中止することはなかった。

問題は、支那事変を極力限定的に処理すべき政戦略指導との関連において、無差別爆撃の危険性をはらむ大都市内の軍事目標攻撃が、果たして中国側の戦意破砕にどの程度役立つか、しかも、限定されたわが航空勢力を考慮した場合、大きな疑問があったが、このようなドゥーエ[9]流の「独立空軍的用法」は当時、世界の兵学思想の主流であったうえ、南京空襲により中国要路に継戦意志の動揺が起きているとの情報も伝えられ、航空攻撃の強烈な実行こそ、事変早期解決の近道であると、当時は信じられていたのである。

*

九月に入り、苦戦中の上海派遣軍に台湾から転用された値賀（ちが）忠治19期少将の率いる陸軍第三飛行団＝偵察二中隊

（九四式偵察機一八機）、戦闘一中隊（九五式戦闘機一二機）、軽爆一中隊（九三式軽爆撃機九機）、重爆一中隊（九三式重爆撃機六機）、計四五機＝は、当初、公大および王浜飛行場（呉淞西方約四キロ）を根拠飛行場として、航空撃滅戦を専らとする海軍航空の地上作戦協力不如意の間隙を補うべく、第一線兵団の戦闘に密接に協力した。

十一月に入って第十軍の杭州湾上陸作戦に際しての航空支援は、折りからの濃霧、雨天等に妨げられながらも活発に行われた。特に中国軍退却部隊に対する偵察と爆撃は、専ら陸軍航空の本然の任務であった。

四、杭州湾、白茆口（はくぼうこう）上陸作戦

軍中央部においては九月下旬、上海に対する兵力増加を「焼け石に水だ」として頑として同意しなかった石原莞爾21期少将が九月二十七日更迭された。代わって下村定20期少将が作戦部長に就任して以来、主作戦を北支から上海方面に転移するための研究が熱心かつ精力的におこなわれた。

十月二十日には第十軍の戦闘序列（軍司令官・柳川平助12期中将、第六、第十八、第百十四師団、国崎支隊＝歩兵第四十一聯隊基幹）を下令し「船舶資材の不足など作戦準備不充分には目をつぶって」（下村作戦部長の回想）、大部隊の上陸は困難であるという従来からの兵要地誌の定説を無視し杭州湾に敵前上陸を断行、中国軍の背後を衝かしめた。

また北支から第十六師団を抽出して上海派遣軍の隷下に編入し、揚子江やや上流の白茆口に上陸して第十軍の作戦に策応せしめ、一挙に戦局を打開しようとしたのである。

百六十六隻の輸送船に分乗した第十軍は十一月五日、ほとんど敵の抵抗を受けることなく、朝霧たちこめる遠浅の金山衛付近の海浜の奇襲上陸に成功、泥濘の悪路を冒し、第六師団を松江から北方の崑山方向に深く突進せしめて上

海の中国軍の背後を衝くとともに、軍主力は西方の金山、嘉善、嘉興付近に進出した。

第六師団の杭州湾上陸直後の状況をみてみよう。

揚陸した野砲を中心とする重車輛部隊は揚陸地点に残置し、師団は小銃、軽、重機と軽砲（山砲と歩兵砲）をすべて兵の肩に担い携帯口糧とできるだけ多くの弾薬のみを身につけて前進した。師団長以下将校は、狙撃を避けるためすべて兵服に着替え、地下足袋、巻脚絆で泥濘の畦道を一列縦隊で進撃する。師団長も馬なし、水田は深田で、中央に一輪車が通れるよう敷石をした幅一尺くらいの畦道があるが、網の目のように走るクリークの橋はすべて落とされている。畦道伝いに迂回路を探しながら進む。

大隊の行軍長径は四キロくらいに延び、道が粘土質のためツルツル滑って、うっかりすると深田に滑り落ちる。行軍速度は一時間、せいぜい一・五～二キロ程度。朝から歩いて金山に着いたのは午後四時ごろであった。

（第六師団通信小隊長・鵜飼敏定氏48期回想）

そして、杭州湾上陸成功後、十一月七日、上海派遣軍と柳川軍とを編合指揮するため、中支那方面軍司令部が設けられて松井方面軍司令官にその任務が中央から示されたが、当初の作戦目的であった「居留民保護」から「敵ノ戦争意志ヲ挫折セシメ戦局終結ノ動機ヲ獲得スル目的ヲ以テ上海附近ノ敵ヲ掃滅スルニ在リ」という積極的なものに変わり、十一月十二日「方面軍ノ作戦地域ハ概ネ蘇州、嘉興ヲ連ヌル線以東トス」との上海西方に進出制令線が指示された。これは注目すべき変化であった。

*

重藤支隊、第十六師団は、遅れて十一月十三日、白茆口に上陸し、福山、常熟方向に突進したのであるが、第十軍に背後を衝かれた上海戦線の中国軍が総崩れとなり退却を開始したのは、これよりさき十一月九日のことであった。

かくて方面軍司令官は「常熟、蘇州、嘉興ノ線ヲ占領シ爾後ノ作戦ヲ準備セントス」との命令を下し、上海派遣軍隷下の各兵団は戦塵を洗う暇もなく十二日、一斉に追撃を発起、第九師団は十九日蘇州を占領、同じく十九日、第十六師団および重藤支隊は常熟を占領、また第十軍主力は急進して同日嘉興を占領したのである。

（要図5参照）

(1) 「編組」とは隷属系統を規定する数個の部隊の組み合わせをいい、「戦闘序列」とは、戦時または事変に際し天皇の令する作戦軍の編組をいう。（戦史叢書）

(2) 中国軍の兵力判断は主に中国第二歴史檔案館編『抗日戦争正面戦場』（江蘇古籍出版社）によった。

(3) 『偕行社記事』昭和十四年四月号掲載「日本軍に関する支那軍側の観察」論文中、八十八師青年将校の「南京上海抗戦に得たる所の経験と教訓」から引用。

(4) 対壕　要塞を攻撃するため正攻法により散兵壕を掘開し逐次敵に近接する塹壕戦を特に対壕という。（『大日本兵語辞典』原田政右衛門・国書刊行会復刻）

(5) 井本参本作戦課員回想、二宮方面軍兵站主任参謀の談は、井本熊男著『作戦日誌で綴る支那事変』（芙蓉書房）によった。本書の資料的価値は高く、かつて辰巳栄一27期偕行会会長が激賞されたことがある。

(6) ファルケンハウゼンは明治四十三年から大正三年までドイツ陸軍武官として東京に駐在したことがあり、蔣介石とは日本語である程度直接会話することができたらしい。ドイツ国防軍の建設者として有名なフォン・ゼークトの後任として昭和十年、中国近代史上最も重大な危機にあたり国民政府軍事顧問団長という重責についたのである。中国軍が賞用してわが軍を悩ました迫撃砲なども、重砲の代用に迫撃砲を使用せざるを得なかったドイツ国防軍再建の体験から出たものという。（この項、宇都宮直賢32期少将回想録『黄河・揚子江・珠江』による。上海戦当時、宇都宮少佐は在上海・大使館附武官輔佐官として渉外問題に奔走した）

(7) 鶏鳴寺東側高地防空砲台はドイツ人技師の指導により岩山をくりぬいて深い坑道を掘り発電機を据え、交換機を備えた通信所があった。この高射砲陣地は完全な電動式で、当時日本軍は装備していなかった高射算定具、照準具、四斜基線測

高機と電気的に連動していた（現在の言葉で表現すればコンピュータ制御されていた）。

＊

ドイツの日本に対する態度は甚だ動揺的で最初には寧ろイギリスと共に日本に反対的態度をとるという面すら見えて居たのである。これは近年におけるドイツ資本の軍備拡張のための原料獲得の必要、販売市場としての支那の重要性などの諸関係から対支進出に対して極めて積極的であり、イギリス或はフランスと結んで支那の所謂経済開発に協力して居たという事情に基づくのである。殊に出先のドイツ商人等は今回の支那事変によって、伸びんとしつつあるドイツの対支貿易が大きな打撃を蒙ることを懸念して、日本に対して面白からぬ感情を抱いていたようであった。

要するにドイツは支那に対して二つの面を持って居るのである。一つは国際政治的な面で、それは直接には欧州の問題を控えて、日本と共に防共枢軸を強化して行く必要があり、他の一つは、ドイツ資本主義それ自身が持っている支那市場に対する経済的な要求である。この矛盾せる二つの面が今日の事変を機として表われ、それが日支事変発生初期におけるドイツの動揺せる態度を生んだのである。この事はドイツの最近における対支投資及び貿易の関係消長の跡を見ると可なりにその根拠が肯かれると思う。ドイツの支那市場に対する投資関係が欧州大戦を以て一応根こそぎに失われた。例えばリーマー教授の一九三一年現在の調査によれば、一九〇二年にはドイツは列国の対支投資の中の二割を占めているが、欧州大戦が始った翌年即ち一九一四年には一割六分強に落ち、更に一九三一年においては僅かに二分七厘に激落し投資関係の比重は著しく減じている。しかし最近においては投資関係においても多少の増加を見せ、特に南京政府の鉄道建設計画の方面にはドイツもまたその乏しい資本の一部を投じて多少積極的気構えを示している。

貿易関係においてはその躍進は大いに見るべきものがあった。一九三一年以来の列国の支那に対する貿易関係の変遷中に見ると、ドイツの占める比率は一九三一年においては僅かに五分であるに対し、日本は二割五分を占めているが、ドイツの対支貿易は其の後次第に発展して、一九三二年には七%、三三年には八%、三四年には九%、三五年には一一%、三六年には一六%、続いて三七年には一五%強を占めるに至り、イギリス本国を既に凌駕して、日本に次いで第三位に上って居る。

一支那人はドイツの対支貿易における特徴を述べて、ドイツの対支貿易には植民地と本国間の貿易の性質が最も明確に現われて居るということを言って居る。即ちドイツの支那からの輸入品は殆んど原料品であり、ドイツからの支那に対する輸出商品を見ると最も多いのは軍需工業品である。更に他の特徴とも云うべきことは対支輸出に対してドイツ輸出商人

と支那の私人企業とが結びついて、ドイツ側からは機械及び工具が提供され、支那側からは流動資本が提供されて相互出資による共同経営の形態をとる場合が少くないのである。工業製品を一種の資本輸出としているのである。ドイツは支那と貿易協定を締結し、バーター制をもって、支那からはタングステン、鉱物及び桐油を、ドイツからは機械、交通材料及び兵器を提供するところまで話がすすんでいたのである。

しかしながらドイツは、この戦争の進むにつれて、前に述べた支那市場に対する二つの矛盾した面の一方、即ち国際政治上の観点から日本に対する防共関係の強化という方に次第に向って来た。そしてその当然の結果として、ドイツ経済にとって相当重要な支那市場に対する考慮を次第に犠牲としなければならぬという状態になってきた。ドイツは一九三二年に支那軍組織の改造の為に国防軍のフォン・ゼークト元帥を指導者とし、その下にファルケンハウゼン将軍を筆頭とする約六十人の軍事顧問を支那に送った。彼等は軍事顧問であると同時に、端的に云えばドイツ武器の売込の斡旋をする仲介者という地位に立って居った。これらの軍事顧問は一方において支那の軍備を高度化し近代化する為の、そして又かかる軍隊を訓練する為の目的を持ち、一方においてはそのために必要なる軍需資材、特に既成の武器を支那に向けて輸出すると同時に、本国軍需工業に必要なる原料、鉱石又は油、皮革類を支那より輸入するという、軍需品とその原料品を中心とするドイツの対支貿易を斡旋する役割を直接間接に果していたのである。事変の発展すると同時にドイツはこの軍需品を中心とする対支貿易の関係を次第に消極化し、他の面即ち国際政治関係に基づく防共枢軸の面を強く出して行かなければならなくなったのである。昨年〔昭和十三年〕の春、最後まで漢口に残っていたファルケンハウゼン将軍以下数名の軍事顧問が全部本国へ引揚げてしまったのはその具体的な現われであった。

（尾崎秀実『現代支那論』岩波書店・昭和十四年）

＊

「三十年二月、参謀本部の西郷従吾36期歩兵大尉の案内で、ドイツ将校が視察に来たのを覚えている」（第二野戦高射砲兵司令部副官・石松政敏氏談）

＊

防空砲火の主力を構成したクルップ社製口径八八ミリ高射砲は固定砲架であるが、製造が非常に容易に設計されており、初速八〇〇米、最大射高一万米に達し要地防空用として手ごろであったので、殆どそのままわが制式火砲に採用して九九式八サン高射砲と名づけた。（『陸戦兵器総覧』）

またボフォース Bofors 七・五サン高射砲六門（一ヶ中隊）は、高射学校に実用試験を委託された。（『砲兵沿革史』第四巻下の2・第二野戦高射砲兵司令官・伊藤範治25期中佐回想）

『正面戦場』によれば南京の中国軍高射砲総数は二十七門で、他に三・七ミリ、二〇ミリ高射機関砲多数があった。

(8) 南京占領後、大校飛行場は、わが海軍中攻の漢口爆撃の発進基地となったが、随伴戦闘機を欠き大きな犠牲を出した。これが航続距離の長い零式戦闘機の開発を促すこととなる。

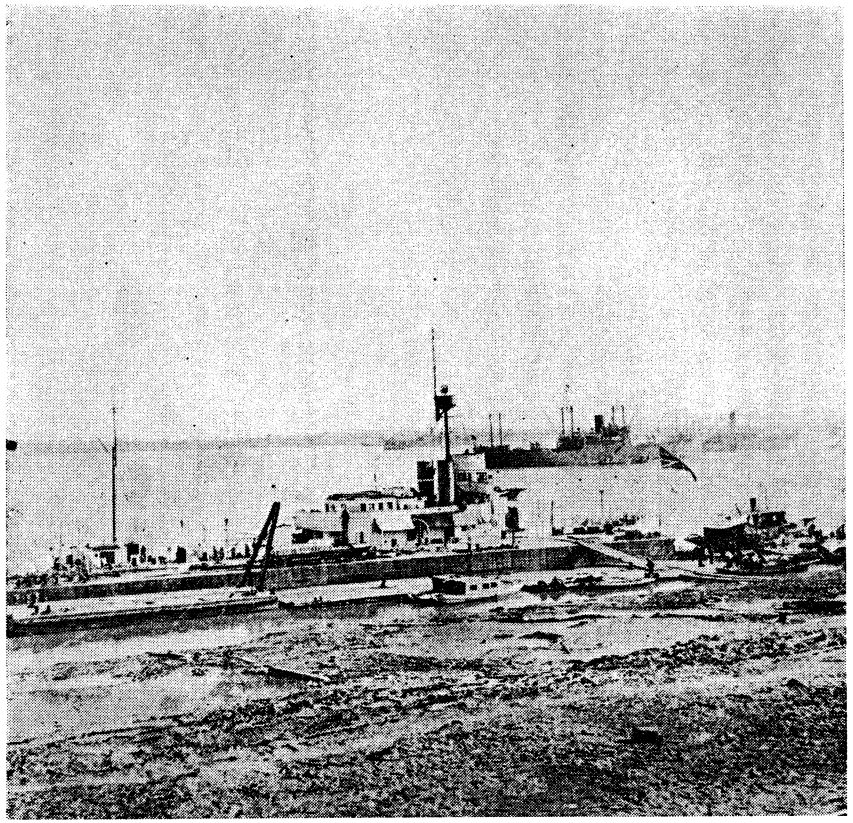
(9) ドゥーエ 一八六九～一九三〇 イタリアの将官。第一次世界大戦の教訓から将来戦においては「空中兵器だけがひとり敵国への攻勢的威力を発揮し、敵国民の戦争意志を挫折させうるとし、何より制空権の獲得如何が勝敗の決定的要因をなすであろう」とした。彼の激しい主張は最高統帥の忌諱に触れ投獄の憂目をみたが、のちムッソリーニにより受け入れられ、彼の思想の最も忠実な実践者バルボ Balbo, Italo 1896～1940（イタリア空軍元帥）により強力なイタリア 重爆撃機隊がつくられる。（小山弘健『軍事思想の研究』一九七〇年刊による）

わが国においても支那事変生起の前年「空軍独立論」が陸、海兵学界でかまびすしく論争された。

半田　良平『幸木』昭和二十三年

上海市外に刈る人のなき稲を見て長息（なげき）しといふ兵は農夫か

朝日新聞・大岡信「折々のうた」より



白茆口の十六師団上陸地点，見るべき揚搭設備はなく重材料の揚陸は大幅に遅れた　第十六師団経理部・金丸吉生軍曹撮影

第二節　南京に向かう追撃

一、「制令線の突破」から「攻略命令」決裁まで

中国軍の総崩れに尾して追撃に移った方面軍は、すでに述べたように早くも十一月十九日には中央から示された蘇州―嘉興の制令線を突破する勢いとなった。

とくに杭州湾上陸に成功した第十軍はこれより先十五日、柳川軍司令官臨席のもとに幕僚会議を開き、「独断南京追撃敢行」を決し、十九日朝「南京ニ向ツテスル追撃ヲ命令」した旨、参謀本部に発電報告するに至った。これは、「太湖東方における包囲作戦不徹底のため敵主力殲滅の機会を逸したが、敵は潰乱状態にあり、この躍動する戦機をとらえ一挙に追撃を敢行すれば、約二十日間で南京は占領可能」との判断によるものであった。

この報告に接した多田（駿15期）参謀次長は大いに驚き、急ぎ追撃禁止の措置をとったが、二十二日になると、中支那方面軍からも第十軍の行動を是認するが如き要旨次のような意見具申が到着した。

「今ヤ敵ノ抵抗ハ極メテ微弱ニシテ飽ク迄南京ヲ確保セントスル意図ヲ認メ難シ、此際蘇州、嘉興ノ線ニ軍ヲ留ムル時ハ戦機ヲ逸ス」

「事変解決ノ為ニハ首都南京ノ攻略ハ第一義的価値アリ」

「第十軍ハ後方ノ成立次第躍進ヲ続ケ得ベク上海派遣軍ハ旬日ノ休養ヲ与フルコトニヨリ南京ニ向フ追撃ハ可能ナリト判断シアリ」

これを受けて、参謀本部第一部では河辺虎四郎24期作戦課長を中心に審議の結果、制令線廃止の結論を得た。当時ドイツの駐華大使トラウトマン Trautman, Osker P. 1877~1950 による和平交渉に期待し、事変の拡大を深く憂えていた多田参謀次長はなお前進不可の方針を堅持していたが、二十四日になってついに同意を与え「中支那方面軍作戦地域ハ之ヲ廃ス」の指示が出されることとなった。

戦面不拡大の中央の方針に基づき方面軍が制令線に停止している間を縫って、上海周辺にあった中国軍の主力はすでに安徽省に、一部は浙江、江北に退却しつつあった。

戦術的にみると、敵主力撃滅の好機は去りつつあったのである。

このころから、参本第一部内でも南京攻略を本格的に研究する機運が醸成されてきたものの、なお二十四日開催された大本営設置（十一月二十日設置）後、初の御前会議においても、

「中支那方面軍ハ上海周辺ニ於ケル戦勝ノ成果ヲ利用致シマシテ機ヲ失セス果敢ナル追撃ヲ実施シツツアリマスカ元来此軍ハ上海附近ノ敵ヲ掃滅スルヲ任務トシ且同地ヲ南京方面ヨリ孤立セシムルコトヲ主眼トシテ編組セラレテ居リマスル関係上　其推進ニハ相当ノ制限カ御座イマスノミナラス　目下其前線部隊ハ其輜重ハ固ヨリ砲兵ノ如キ戦列部隊スラモ尚遠ク後方ニ在ル者勘ク御座イマセン　随テ一挙直チニ南京ニ到達シ得ヘシトハ考ヘテ居リマセヌ　此ノ場合方面軍ハ其ノ航空部隊ヲ以テ海軍航空兵力ト協力シテ南京其ノ他ノ要地ヲ爆撃シ　且絶ヘス進撃ノ気勢ヲ示シテ敵ノ戦意ヲ消磨セシムルコトト存シマス。」

と、軍の進撃を抑制する意思が表明されている。しかし、説明にあたった下村定第一部長は「〔御前で〕此の際どうしても申上げて置かねばならないと云ふ考へから」、準備した原案になかった、

「統帥部ト致シマシテハ今後ノ状況如何ニヨリ該方面軍ヲシテ新ナル準備態勢ヲ整ヘ南京其ノ他ヲ攻撃セシムルコトヲモ考慮シテ居リマス。」

と「南京攻略」を示唆する文言を独断追加し、「後で〔多田〕次長から叱られ」ている。（下村定回想録）

当時、参本作戦課・井本熊男大尉の回想によれば、

「石原少将と交代した下村第一部長の考え方は積極的であって、就任当初から敵に大打撃を与え、南京攻略までやらなければ事変解決の端緒はつかむことができないと考えていたようである。」

という。

この間の事情について、河辺虎四郎作戦課長は、次のように回想している。

「私が上海に参りまして武藤章25期（方面軍）副長と話をした時（十一月十七日）、副長は『南京をやつたら敵は参る』と申し、私は『南京はやらなければならんが、やつても蔣はまだ参らんよ』などと水掛論をやつたことを思ひ出します。」

*

松井方面軍司令官は、

十一月十五日「東京ヨリ来レル影佐禎昭（かげさ さだあき）26期大佐〔参本・第八課（宣伝謀略担当）長〕、柴山兼四郎24期大佐〔軍務局軍務課長〕ニ南京攻略ノ必要ヲ説」く。

十一月二十五日には「参謀総長ヨリ伝宣電アリ。予テ方面軍ノ作戦区域ヲ蘇州—嘉興ニ制限セラレタルヲ解除スルトノ意ナリ。尚〔多田〕次長ヨリ〔塚田攻19期〕参謀長宛電ニ依レハ軍ハ一部ヲ以テ無錫—湖州ノ線ヲ占領スルモ、占領後更ニ西方ニ作戦ヲ拡大セシメサル中央部ノ意嚮ナルヲ告ク。中央部ハ尚南京ニ向フ作戦ヲ決定シアラサル事ハ

明瞭ニシテ、其因循姑息誠ニ不可思議ナリ。仍テ更ニ此旨参謀総長及次長宛督促セシムル事トス。」

と日記に記している。

すなわち、松井方面軍司令官は二十五日、隷下両軍に対し無錫―湖州の線において爾後の作戦を準備せよと命じたが、第十軍は、さきに中央から南京追撃中止の命を受けたのちも「南京ニ向フ作戦ヲ準備」するなどと曖昧な軍命令を下すことによって表面を糊塗しつつ、次々と既成事実を積み重ねていたのである。

「南京攻略の決意も制令線の突破も、常に第十軍が独断の名のもとに先駆けをなし、方面軍がこれに追随し、中央が追認する形をとって進行したことは注意を要する。」（戦史叢書）

*

また、中央においても、現地軍が余勢を駆って所命の無錫―湖州の線以西に進出しつつあるのを知った参謀本部下村第一部長は、十一月二十七日、塚田方面軍参謀長あて「当部ニ於テハ南京攻略ヲ実行スル固キ決意ノ下ニ着々審議中ナリ　未タ決裁ヲ得ル迄ニハ至ラサルモ取敢スオ含ミマテ」と親展電報を打ち、これに対し方面軍参謀長は「唯今貴電ヲ見テ安心ス　勇躍貴意ニ副フ如クス」と返電している。まさに矢は弦を放たれんとしていたのである。

「有末〔次〕31期中佐が作戦指導要綱を起案して来ましたので、〔多田〕次長には之に就いて色々突込んで申上げまして到々二十八日だと思ひますが同意されましたので、それからは一瀉千里に事がはこんだのでありますが、そこに行くまでには非常にゴタ〳〵したのであります。」

と、下村作戦部長は回想している。

かくて、「南京攻略命令」は十一月二十八日、ついに決裁される。

二、追撃間の補給について

第一線の兵は軽装備で急ぎ進撃を開始したが、その後方諸部隊は不完全な補給路のため行動は困難を極めた。以下、当時の記録により補給の実状を見てみよう。

すなわち、上海戦線に在った派遣軍将兵は、約三ヵ月余にわたる悪戦の陰惨な空気から解放され、新たに戦線に加入した第十軍、第十六師団とともに、まず南京城外の磨盤山山系に向かったのであるが、太湖周辺の江南平野には到るところにクリークがあり、このクリークにかかる橋は殆ど破壊され、また路外は深い水田地帯である。そのため、民船を操りクリークを利用して進んだ一部を除き、数少ない道路に歩、砲兵、輜重、自動車隊の人馬車輛が蝟集して先を争うのであるから、その渋滞は甚だしかった。

*

これよりさき、上陸直後の第十軍の後方について松井石根大将は日記にこう記している。

十一月八日（小雨）

第十軍ノ上陸ハ相当困難ニシテ両師団（第六師団と第十八師団）ノ野砲ハ未タ上陸ヲ完ラス。第百十四師団ノ上陸ハ勿論未タ開始スルヲ得ス、殊ニ陸上交通困難ニシテ泥濘ト化シ僅ニ輜重車輛ヲ通スル道路一アルノミ。水運モ携帯舟艇ノ揚陸困難ニシテ未タ実施スルヲ得ス、両師団ノ携行セル折畳ミ軽渡河材料ヲ以テ多少共明日ヨリ水運ヲ行ヒ得ル情態ナリ。

自然第十軍部隊ハ殆ト現地ノ物資ニ依リ此処数日ヲ給養セサル可ラサル苦境ニ在リ。是レ参謀本部カ不完全ナル智識ト偵察ニヨリ此計画ヲ定メタル結果ニシテ……

十一月十四日（晴）

第十軍ノ輜重其他ノ兵站部隊ハ金山衛附近ノ揚陸ヲ断念シ、暫ク上海ニ其揚陸点ヲ変更スルコトヲ決シ、漸次輸送船ヲ上海ニ廻送シ……

この第十軍輸送船の上海回航は大きなトラブルを起こした。

「第十軍は金山衛城付近の遠浅海岸に五百メートルの桟橋を構築したが役に立たなかった。同軍は、百六十六隻の輸送船中九十七隻を上海に回航し、そのため黄浦江には、合計百二十四隻の輸送船が集まった。上海には、派遣軍の軍需品を積載した輸送船二十七隻が停泊していたが、右九十七隻の到着で、その揚陸は著しく妨害せられている。どの船に何が積んであるのかさっぱりわからず、これを確かめるのに苦労する。船長も知らず、一とおり調べるのに三日を要した。

方面軍の糧食は約二日分くらい保有量がある。毎日揚陸しているのは一日程度で、この状況は容易に改善せられない。」（十一月十七日・方面軍兵站主任参謀・二宮義清 34期 少佐談）

*

軍馬は長期、船艙にとじこめられる船舶輸送には弱い。

「降雨の為道路不良就中橋梁は敵の為破壊せられ一日数十の橋梁を架設しつつ追撃し此間斃馬数百頭を生ぜり。」（第九師団参謀部作製『第九師団作戦経過の概要』十一月十五日・崑山追撃の項）

「馬は痩せ衰えて役に立たない。自動車の不足を強く感じている。」（二宮方面軍兵站主任参謀談）

*

これに反し、古来、中国の交通は南船北馬と称せられるが、追撃発起後は陸上と異なり、民船を集めた舟運の効率

は高かった。

十一月十八日（曇又小雨）

「軍ノ追撃ニ伴ヒ補給ハ蘇州河、瀏河及白茆河又ハ滸浦河ヲ利用シ、主トシテ水運ニヨリ一部ノ陸上輸送ト相俟テ概ネ其目的ヲ達成スヘキ見込ナルヲ知ル。」（『松井石根日記』）

十一月十一日、第九師団経理部は、その報告に「所見」として、

「〔上海派遣〕軍ハ漸々今日ニ至リテ補助兵站線トシテ水路ヲ利用シテ揚行鎮迄ノ糧秣輸送ヲ開始セリ。思フニ水ニ明ケ水ニ暮レ行ク江南ノ地、地図通ノ水ト舟ノ地ニ来リ何ソ水路利用ノ遅キヲ慨カサルヲ得ス。陸軍省カ嘗テノ上海事変其他ニ於テ何ヲ学ヒタルカ。真剣味ト烈々トシテ燃ユルカ如キ熱意ナカリシコトヲ遺憾トスル所ナリ。

吾人ハ軍当局カ此ノ当時加給品ノ追送ヨリモ舟ノ追送ヲ為シタランニハ、如何ハカリ兵ノ給養ヲ良好ナラシメシナラント痛感スル次第ナリ。」（『第九師団経理部衣糧科附部員以下行動一覧表』）

と嘆いている。

また同『行動一覧表』十一月二十二日（月）晴の項に「歩三五収容ノ捕虜百四十名野戦倉庫ノ使役トシテ使用スルコトトナレリ」との記載がある。

*

いずれにせよ、第九師団参謀部の報告する通り「上海附近より南京に至る約百里の間殆ど糧秣の補給を受くることなく現地物資のみに依り追撃を敢行」したのであって、歩兵第七聯隊史は「給養は殆ど徴発に依って賄ったが、副食物の他大なる不足を感じなかった。これは物資豊富な地方の作戦であったからである。しかし多数の駄馬を失い、歩

兵砲、機関銃中隊、通信班、大小行李等は非常に苦労した。臂力搬送だけでは追及することができなかったので、支那人人夫牛馬を徴発し或は民船を利用する等、凡有手段を講じたのであった」と記している。

『松井日記』十一月十八日にも、

「米ハ太倉其他所在ノ地ニ相当多量現存セルヲ以テ一時食糧ノ補給ヲ欠クモ糧秣ハ心配ヲ要セス」とある。

*

十一月十三日、揚子江を溯り白茆口に上陸した第十六師団も砲兵、後方補給機関の進出は困難を極めた。

差遣侍従武官に対する第十六師団「状況報告」　十二月一日

一、作戦経過ノ概要

第十六師団ハ数船隊トナリ、十一月十二日、呉淞沖ニ達シ、十三日払暁、白茆口附近ニ上陸シ、一部ヲ以テ白茆口附近ヲ占領シ、主方ヲ以テ支塘鎮ニ向ヒ前進スベキ軍命令ヲ受領ス。

師団ハ重藤支隊ニ引続キ十三日、第一船隊タル歩兵第三十旅団（第三十八聯隊欠）ヲ基幹トセルモノヲ以テ佐々木支隊トシ、揚子江岸ニ上陸シテ、速カニ支塘鎮ー常熟道ニ進出シ、敵ノ退路ヲ遮断セシム。

佐々木支隊ハ、退却掩護ニ任ズル四、五千ノ敵ヲ撃破シ、夜間追撃ヲ続行シテ十五日、常熟東方約四粁附近ニ進出シ、「トーチカ」ヲ有スル既設陣地ニ拠ル敵ト相対ス。

上陸地点ヨリ戦場ニ至ル間、車輛ヲ通ズル道路ナク、加フルニ連日ノ降雨ノタメ泥濘ノ悪路ト化シ、部隊ノ進出意ノ如クナラズ。師団砲兵全ク参加ノ見込ナク、第十一師団及ビ軍砲兵ノ協力ヲ得テ本攻撃ヲ実行セリ。

十九日夜半、敵ノ退却ニ尾シテ、夜間追撃ヲ敢行シ、当面ノ敵ヲ駆逐シテ二十二日夕、東亭鎮（無錫東方）ニ

進出ス。当時、師団ノ歩兵部隊ハ之ヲ集結シ得タルモ、砲兵ハ僅カニ四門到着シタルニ過ギズ、後方補給機関ハ未ダ上陸ヲ完了セズ。

東亭鎮附近ノ「トーチカ」ヲ有スル既設陣地ヲ攻撃シ、二十六日午後二時三十分、無錫ヲ占領セリ。師団ハ、直ニ草場少将ノ指揮スル歩兵三大隊、軽戦車隊、野砲兵一大隊ヲ追撃隊トシ、京滬鉄道ニ沿フ地区ヲ常州ニ向ヒ追撃セシム。

追撃隊ハ、無錫市内ニ充満セル敵ヲ掃蕩シ、或ハ潰走中ノ敵ニ多大ノ損害ヲ与ヘツツ追撃シ、二十九日午前十一時四十分、常州ヲ占領シ、続イテ丹陽ニ向ヒ追撃中。師団主力ハ十一月三十日、常州ニ進入セリ。

師団ノ大部ハ集結シ得タルモ、騎兵第二十聯隊、野砲兵第二十二聯隊ノ三中隊、大隊段列ノ主力及ビ聯隊段列、輜重兵第十六聯隊、野戦病院ハ尚船上ニ在リ。又各隊大行李ノ主力ハ、或ハ船上、或ハ揚陸地ニ在リテ、未ダ集結ノ見込立タズ。

二、経　理

上陸以降ノ給養ハ、主トシテ現地物資ニ依リ、調味品及ビ副食等ノ一部ハ追送ヲ仰ギタルモ、幸ニ江蘇省特産ノ米ヲ各地ニテ得ラルルタメ、比較的良好ナル給養ヲ実施セリ。

師団ノ大行李及ビ輜重等、隊属ノ補給機関ハ、未ダ揚陸途中ニアルヲ以テ、主トシテ地方小舟ヲ徴用シテ、「クリーク」往来ニヨリ、概ネ大行李、輜重ノ代用ヲツトメツツアリ。

馬糧ノ追送ハ、容積ノ関係上頗ル困難トシツツモ、現地ニオケル刈取ノ稲ヲ利用シ、殆ンド内地ニ見ル給飼ヲ実施。

被服ニ関シテハ、鹵獲セル靴下、綿入、朋衣等ヲ支給。

三、衛生

将兵ノ健康度ハ、逐次気候風土ニ慣馴シ、増強シツツアルヲ認ム。

コノ地上陸以来ノ戦死総計一九二（内将校一四）、戦傷五九（内将校二三）、平病約二〇〇ニシテ、傷病者ハ迅速ニ衛生機関ニ収容セシメ、初療ノ普及ニ遺憾ナキヲ期シアリ。

*

十一月二十二日の『松井（石根）日記』には、

「両軍ノ補給ハ連日ノ追撃前進ニ伴ハス已ムナク飛行機ヲ以テ空中ヨリ糧食弾薬ヲ投下シ、其急ヲ救フノ状ナリシカ、今日ノ晴天ノ御蔭テ今後逐次其状勢ヲ恢復スル事ヲ得ン」とある。

方面軍は隷下の第三飛行団の九三双軽九機（独立飛行第十一中隊）、九三重爆六機（独立飛行第十五中隊）を以て「空輸等にも従事」せしめた（戦史叢書）のである。

*

第六師団も状況は同じで、「金山衛城附近上陸後南京攻略迄ノ給養ハ殆ント現地ニ於テ徴発セル糧秣ニ依リタリ。幸ニ至ル所精米ヲ徴発スルヲ得、人糧ニ於テハ困難ヲ感セサリシモ馬糧ノ徴発ニハ頗ル困難ヲ感シ」たとし、井戸がないため濁ったクリークの水を飲むしか方法がなく、防疫給水班の活動に「将兵一同蘇生ノ思ヒアリ」と喜びを記す。

また湖東会戦においては飛行機から若干の衛生材料の投下を受けている。輜重が師団主力に追及して来たのは実に南京入城後であった。（『戦時旬報』第六師団司令部調製による）

また小倉・歩兵第百十四聯隊（第十八師団）聯隊砲中隊長・中川泰秀 19期 少佐の日記によれば「水田ニ稲束ヲ敷キ

桑樹ヲ伐採シツツ火砲〔三一式山砲〕弾薬ヲ水牛ト人ノ臂力ニ依リ路外ヲ行進ス。夜ニ入リテ行進意ノ如クナラス。水牛倒レテ動カス人疲レテ進マズ。遂ニ休止シテ体力ヲ回復シ明日天明ヲ待チテ一挙ニ難関ヲ通過スルニ決シ……」とあり、盛んに水牛を使用している。

さらに戦史には明記されていないが、特設師団における体力の劣る予後備兵の大量の落伍は、戦闘行動による損耗を上回り、甚だしく戦闘行動を制約した。

*

南京に通ずる大動脈・京滬・滬杭鉄路の復旧に関しては、

十一月二十七日（曇）

「鉄道聯隊（二大隊）〔鉄道第一聯隊・長工兵大佐・佐藤質（ただす） 22期〕昨日其先頭ヲ以テ〔北支より〕到着シ差シ当リ蘇州、嘉興、平望ヲ目途トシテ、鉄路ノ補修材料ノ蒐集ニ努メ、遅クモ十二月上旬中ニハ其運輸ヲ開始スヘキ見込ナリ。」（『松井日記』）

また、飯沼守派遣軍参謀長は「方面軍ノ作戦腹案、鉄道開通ハ〔十二月〕七日ノ予定〔南京に向かって〕前進開始ハ五日ノ筈」と十二月一日の日記にしるしているが、鎮江のトンネルが中国軍の手によって機関車を引き込んだうえ爆破閉塞されたので、鉄道第一聯隊第七中隊第四小隊（長篠原武司、のち鉄建公団総裁）をもって鋭意その復旧に努めると共に、取り敢えず山越しの仮迂回線路を建設したものの、南京までの鉄道開通は十二月二十二日のこととなった。（このトンネルは、のち「篠原トンネル」と呼ばれた）

当時、上海武官府に在った岡田酉次主計少佐の回想によると、大場鎮陥落後の軍事輸送は鉄道に期待する所が甚だ大きく、事態を憂慮した参本第三部（主任・河村弁治 34期 工兵少佐）は、華北に派遣輸送の途上にあった鉄道第一聯

隊主力を急遽華中に転進せしめると共に鉄道省にも応援を要請し、九六〇〇型機関車二十五台をはじめ貨客車六百台、技術者約八十名を急派したのであるが、残念ながら南京に向かう追撃戦闘間には、鉄道輸送は大きな寄与はしていない。(『華中鉄道沿革史』関根保右衛門編著)

渡辺　周一「国民文学」昭和14年11月

首都めざし潮とせまりゆく兵も　落ちのびてゆく兵も悲しも

『昭和万葉集秀歌』講談社現代新書より